

刊行にあたって

1965年にオッセオインテグレーションタイプのインプラントが人体に応用されて以来、その適応症は全部欠損症例のみならず、部分欠損症例へと拡大されました。また、現在では機能の回復だけではなく、審美性の回復にも適用されるようになりました。

オッセオインテグレーションを発見された故・P-I Brånemark 教授は、「インプラント治療は究極のリハビリテーションである」として、あらゆる方向から負荷がかかり、全身のなかで最も不潔になりやすい過酷な環境である口腔内において、長期にわたり患者さんの QOL(Quality of Life) の向上に寄与するという信念のもと、インプラント体(当時はフィクスチャーと呼ばれていました)やアバットメントの開発に取り組みました。

私たち歯科衛生士が携わるのは歯科用インプラントですが、インプラント治療は、股関節や膝関節など全身にまで適応範囲が拡大しており、性別・年齢・歯牙欠損形態にかかわらず、世界中で使われています。そして、失われた機能や審美性の回復により、社会性を取り戻すことも可能になっています。

しかし、口腔内はつねに感染と背中合わせになっている特殊な環境です。そのため、術前の歯牙喪失原因の改善から始まり、インプラント体埋入時における無菌操作、アバットメント連結時以降のセルフケアの徹底、上部構造装着時以降の力のコントロール、そしてメンテナンス期におけるセルフケアとプロフェッショナルケアの実践によってつねに感染を予防し、もし感染が確認された場合には、すみやかな対応が必要となります。

スタッフ全員がチームの一員として責任をもち、積極的に患者さんに寄り添うことで、インプラントの長期的安定を図ることが可能となります。本書がその一助となれば幸いです。患者さんの笑顔のために、さあ、今日も頑張りましょう！

2018年11月

柏井伸子